

北海道支部通信

<https://www.facebook.com/JAChokkaidoYouth>

[事務局] 〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 [事務局長] 清水義浩

8月、沢登りで北日高の名峰へ

晴天に恵まれた8月10日、11日の両日、同じ日程で、同じエサオマントッタベツ川の本流と支流から、隣接する北日高の名峰2座、エサオマントッタベツ岳と札内岳に登る2つの沢登り山行が行われた。 (1-3面)

遙かなるエサオマントッタベツ岳 (1902m)

8月10-11日 [沢登り] 長谷川恵美子

山内さんをリーダーに、三浦さんと私との3人でエサオマントッタベツ川からエサオマントッタベツ岳に登った。

8月9日午後に札幌を出発し、トッタベツヒュッテを目指す。食料を調達して17:30頃に小屋到着。

10日、5:00に小屋を出て、びれい橋を越えたところの駐車帯に車を駐め、準備を整えて5:30スタート。戸



札内岳山頂



蔦別川林道からエサオマン戸蔦別林道へ、熊の糞を所々に見ながら、やがて笹がかぶってわかりにくくなる道を2時間ほど歩くと標高715mの林道終点=入渓地点だ。

緩い傾斜の沢を歩き始める。まもなく札内岳へつながるガケノ沢の合流。単調な沢歩きが続く。水は澄み、岩盤に走る白い筋が美しい。空には雲が流れているが、目指すエサオマントッタベツ岳の稜線と北東カールが遙か彼方に見えている(写真2面①)。緩やかで長い長いエサオマントッタベツ川をさらに遡る。(2面へ続く)

【目次】

- 沢登り山行報告 & コラム 1 - 5
- 10月の秋山山行報告 6 - 7
- 美瑛富士携帯トイレブース点検活動 8
- 関西支部90周年・全国支部懇談会 9
- 2025年度忘年会のご案内 10
- 2025-26年積雪期の山行予定 11
- 長谷川雄助さんを悼む 12



(1面から続く) 823m 二股も 997m の山スキ一沢出合も右へ。この出合は、大岩の上にピンクテープを巻いた石が置かれていた。それからは傾斜が少しずつ増し、大きな滝がいくつか立ちはだかり、1245m からがこの沢の核心部(写真②)。ここは左岸に巻き道があり、フィックスロープもあったが、私にとっては緊張の登りだった。

そこから続く、長く(400メートルくらいはあったか?)急なナメは、所々こけが生え、滑りそうで緊張したが、リーダーの後を慎重に登る。後ろを振り返り、明日の下りを思うと少し不安になる。徐々に傾斜は緩み、13:30過ぎに広々とした北東カールに出た(写真③)。扇形に広が



る稜線に取り囲まれた、その憧れの絶景は、日高をあまり知らない私の脳裏に深く焼き付けられた。

雲がかかっているので、今日稜線まで行くのは止め、草地にテント設営。小雨が降り始め、テントに入ってからは遠雷も鳴る。明日の下山のことが頭をよぎる。

しかし、翌朝の東の空は明るく、きれいな朝焼けだった。準備をして頂上へ向け出発。カール壁の急なガレ場を、落石に注意しながら慎重に登る。稜線が近づいていることが予感できる登り。そして、一步を進めると、日高山脈の雄大な眺めが待っていた。ハイマツをかき分けてぐいぐい進むと、まもなく札内JP。目の前に、すっきりと空に向かって屹立するエサオマントッタベツ岳が迫る(写真④・後ろは幌尻岳)。少し休憩をとる。近づいた頂上に励まされながら、少し歩きやすくなった道を登る。

7時過ぎ、三角錐のような美しい山容のエサオマントッタベツ岳の頂上に立つことができ(写真1面上)、言葉にできない感動に包まれた。グルリと360度、リーダーの山座同定に聞き入る。南には、昨年登ったカムイエクウチカウシ山が堂々とその山容を誇っていた。

帰路は慎重に急な滝を降りて核心部を過ぎ、長い長い沢を歩き、暗くなる前に駐車帯に戻ることができた。リーダーと同行のメンバーに感謝。

○参加者 L山内忠、長谷川恵美子、三浦一恵

ガケノ沢から札内岳(1896m)へ

8月10-11日【沢登り】 横山諒平

名和田さん、今さん、私の三人でエサオマントッタベツ川の支流ガケノ沢を遡行し、札内岳に登った。

8月10日6:15に岩見沢集合。日勝峠を越えて十勝へ。戸鳴別川林道を車で走る。戸鳴別川は水の透明度が高く、釣り人にも人気の川だ。そんな美しい川の源流の一つを遡ってピークへ登り詰める、大変な挑戦が始まった。

私は今シーズン沢登りに入門し、室蘭岳以来2回目の沢登り山行。果たして無事に頂上に辿り着けるだろうか。

戸鳴別川林道のびれい橋を渡ってすぐの駐車場に車をとめ、各自準備をして10:10に出発。晴れて日差しが強い、沢日和の天気だ。荒れた林道を3.5kmほど歩き、林道終点でエサオマントッタベツ川に入渓する。草いきれのこもる林道から川に出ると、澄んだ流れと清々しい風が心地良い。ガケノ沢の出合で休憩がてら竿を出すと、すぐにオショロコマが食ってくる。どうやら今夜のおかげには困らなさそうだ。

ここからガケノ沢を1kmほど遡り、840m二股の開けた河原をテント場に決めて、13:00に荷物を置く。テントを設営し焚火用の流木を集めたら、3人それぞれに竿を出してオショロコマを釣りに行く。源流域の細い流れだが、食べ応えのあるサイズが釣れて楽しい。名和田さんが料理したムニエルはとても美味しく、贅沢な夕食となった。食後は焚火を囲んで談笑し、早めに寝る。

夜中に軽く雨が降るも、明け方には晴れて、11日も沢日和の天気(写真⑤)。朝食と身支度を済ませて4:40に出発する。ゴーロー帶から最初の滝が見えてきて本格的な沢登りの様相を呈する。そんな矢先に私の靴のフェルトソールのかかとがはがれてきた。だいぶ古い沢靴なので接着剤が劣化していたようだ。ダクトテープと細引きで応急手当をして様子を見る。どうやらなんとかなりそうだ。

ルート上には大小様々な滝があり、時には名和田さんにロープで引っ張ってもらひながらなんとか攻略していく。大きな滝を高巻くときは、高さに緊張したが、整備された登山道ではなく自然の地形そのものを登ることに面白さを感じる(写真⑥)。これが沢登りの魅力の一つなのだろう。

標高が上がるにしたがって傾斜はきつくなり、見上げるような角度になる。山頂直下では木を手掛かりに一歩一歩登り、最後に濃いハイマツの藪をかき分け、やっと尾根に出る。少し歩き9:50についに山頂に到達(写真1面下)。エサオマントッタベツ岳と北東カールがよく見



える(写真⑦)。険しい日高の山に登頂できた達成感で胸がいっぱいだ。

しばし眺望を楽しんだら、名残惜しいがピークを後に下山開始。山頂直下の斜面を木につかまりながら下る。登りの時は気づかなかったが、熊の糞がいくつかあつた。こんな険しい場所も彼らの生活圏なのだな、と妙に感心。下りでは懸垂下降7回。初めは腰が引けていたが、7回もやっているとある程度慣れて楽しくなってきた。

16:00にテント場に戻り、30分で撤収して出発。あとは滝も無いし、歩くだけと気を抜いていたら、林道に上がるポイントを見落とし、復帰にひと苦労。ヘッドライトを使用しながら林道を歩いて、20:00に駐車場に帰還した。

沢登りと日高の魅力を十二分に楽しめる素晴らしい山行だった。反省点を改善して次の山行に臨みたい。

○参加者 L名和田豊、今芳文、横山諒平

三峰山沢右股 - 富良野岳**9月13日 [沢登り]**

名和田豊

当初は9月13～15日の連休でエサオマントッタベツ岳の予定だったが、天気予報が思わしくなく、かろうじて十勝連峰が13日だけは行けそうなので、三峰山沢右股から富良野岳への日帰り山行とする。

9月13日、前泊の白銀荘を出発して駐車地点へ。装備を整え、ヌッカクシ富良野川、三峰山沢を軽く渡渉して左岸沿いの林道を歩く。林道脇に大量のボリボリ発見、採取。おおよそ3kgの収穫。幸先の良いスタートだ。

1170mの三峰山沢右股出合から10分ほどで九重ノ滝到着。いつもなら水流際の右岸直登だが、以前の記憶とは違い、右岸は水苔、草付きがたくさんあって直登は危ぶまれるので、安全をとって高巻き。滑って落ちると下まで行きそうなので、慎重に沢に降りる。

ここから断続的にピリ辛の小滝、ナメ滝が続き、巻いたり直登したり、楽しい時間が続く。1時間ほどで華雲ノ滝（写真）。左岸から高巻いて通過。

1550m付近では、以前あった通称オーバーハングの滝が上部からのガレに埋まっていて簡単に通過。源頭も以前は一面のお花畠だったが、やはりガレで全滅。時期は遅いが少しは花が見られるかと思っていたので残念。

さらに源頭を詰めて北尾根へ向かうが、上部はガスがかかり始め、風も強くなってきた。予報より早く天気がく



れ始めたので、ハイマツを漕いで、富良野岳と三峰山との縦走路分岐点に逃れる。沢装備をといて少し休憩。

ちなみに、この分岐点にデポしてあった5個のリュックのひとつが雨蓋に、自分の出身高校の名前が記載された布が縫い付けてあってびっくり。いやはや、まだ出身高校の山岳部があったのには感動した。ここで引率の先生2人と後輩5人に会い、自分が1972年、メンバーの今が1983年の卒業という話でしばし盛り上がる。後輩たちは孫のように可愛らしかった。

そして富良野岳を目指す。頂上では爆風のなか急ぎ写真を撮って下山。

この沢の逆行は今回で5度目だが、この時期は、ネオプレーンの沢ソックスを履いていても水が冷たかった。

○参加者 L名和田豊、今芳文、会員外1名

白石ルームの布団干し、雑草取り、庭木剪定、清掃作業を8月30日に実施

毎年恒例の白石ルームの布団干し、庭の雑草取り、庭木の剪定、室内清掃作業などを、8月30日（土）に18名の参加者の協力のもと実施しました。生憎の小雨交じりの天候で、布団干しはできませんでしたが、布団類の整理整頓と室内清掃はしっかりと行いました。また屋外作業としては、庭の雑草除去、庭木の剪定に加え、ルーム全体の壁際の雑草除去作業も、刈払い機を使って丁寧に実施しました。

昼食を戴きながら、参加者それぞれの近況報告を行

元北海道支部会員の写真家・上田大作さんがエッセイ集を出版

どこかの森で。
森のどこかで。
厳しくも美しい野性の日常と、
命をつなぐ特別な瞬間が日々繰り返されている。
大自然のリズムに溶け込み、
徹底的に観察することで見えてきた、
多様な生き物たちが織りなす万華鏡のような物語。

北海道の自然を20年にわたって
撮ってきた元北海道支部会員の写真家・上田大作さんが、野生動物の息づかいを感じるエッセイ集を出版。

明日も、森のどこかで
上田大作

本体2700円（税別）閑人堂刊



自分にはレベルが高いと思っていた。今年6月、大雪高原温泉線開通で残雪期の縁岳からの撮影に出かけた時に、N氏と同行させて頂いた。

「日高の行きたい山へ行くなら沢歩きしないとね」。

うーん、沢靴履かなきゃダメなの知ってるけど……。それまで私は登山靴履いて渡渉で行ける所、チロロ林道から北戸鳶別岳で幕営して幌尻岳や伏見岳などを。

先ずは沢靴のみ購入し、ハーネス等お借りして初の沢登り（というか沢歩き）。ハーネスに環付きカラビナ、スリングなどを付ける。ちょっとドキドキ、ワクワク。緩やかな水面に足を踏み入れる。テレビで見たような美しい景色が目前に広がる。

水流が多くなると足を取られそうになったり、体のバランスをとりながら進むのは登山には無いような感覚だった。滝を前にして感動し、高巻き（という名の敷漕ぎ）したり、フィールド・アスレチックのような、探検しているような楽しさ。へつって川の淵を進む事を教えてもらう。グリップ出来る所を探し、バランスを取って先へ進む。

上手くいかずに滑ってドボン！これも楽しい！次は落ちずに進みたい。来年のリトライ決定！緊張しながら滑滝や階段状の滝の脇を足元をゆっくり確認しながら進み、クリアできた時、安堵感と嬉しさが。その先の景色を見てみたい。それだけだった。

登山道はない。自らルートを見つけ進んでいく。白老川支流の赤川、次は木挽沢から神威岳。ロー

▲写真左上：木挽沢の滝を登る竹崎さん

►写真右下：白老川・赤川の滝（竹崎良子撮影）

※今夏、白老川・赤川と小樽内川・木挽沢で初めて沢登りをした竹崎会員に体験記を書いてもらいました。（黒川伸一）

ワークも経験させてもらいました。N氏がスタッフ進むのに、真似できないもどかしさ。きっと苦笑しているのだろう。地形図を見て、GPSで位置確認したり。やっぱり探検だね！

今まで登山道を進み、山の中で星を撮り、流星に出会い、夕景に感傷し、新しい朝を迎えてきた。厳冬期を越えて咲き誇る花や小動物の命に山で生きる健気さと強さを教えられてきた。またひとつ、山との関わり方が増えた。

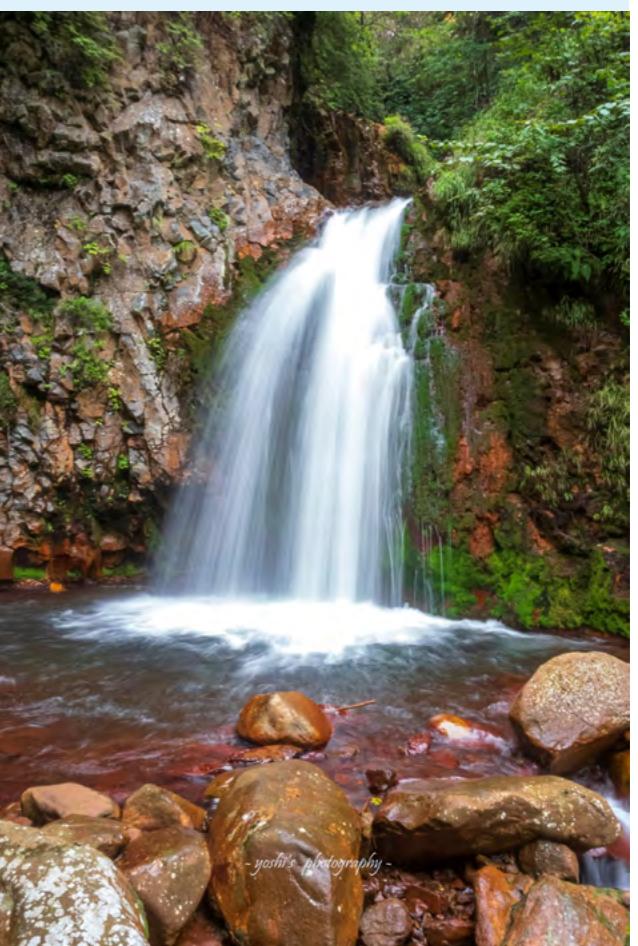
とても楽しかった。少しづつ慣れたら、もっと楽しいのだと思う。撮影も、どうすればこの楽しさや美しい景色を伝えられるのだろう。

「人の心に迫つて来るものは、選び抜かれた被写体に込められた撮影者の心だ」と、某フィルム会社で長年研究され、膨大な数の写真を見てきた大先輩からの教えを忘れずにいます。気負わず、素直な気持ちで被写体と向き合いたい。

沢登りは楽し。見上げる青空。来年は沢から日高の山へ行けるかな。行けたらいいな。

沢登りは未知の世界

竹崎 良子



ニセイカウシュッペ山・大槍・アンギラス(軍艦山)**10月5日【登山道】**

佐藤精久

紅葉が進む北大雪へ。参加者4名の国籍はイギリス、アメリカ、日本で、3カ国からなる国際隊となった。前日の10月4日は層雲峠オートキャンプ場で焼肉パーティーを楽しみ、バンガローで宿泊した。

5日はキャンプ場を出発して一旦旭川方面に戻り、国道273号線を北見方面に進んで10km弱の中越地区にニセイカウシュッペ山(1883m)への標識があるので右折し、その後も標識に従い約11km走ると登山口に到着。広い駐車場には既に10台ほどの車があった。

入山届を記載して出発すると、しばらくは広くなだらかな登山道を、落ち葉を踏みしめながらゆっくり歩を進め。徐々に傾斜がきつくなり、道も狭くなつて笹が被つくる一方で、景色が開けて大槍(1840m)やニセカウが正面に展望できるようになる。先行していた酒井さんとミアさんが、すでに大槍を往復して分岐で待っていた。4人で集合写真を撮って(写真①)から、齊藤さんと私は大槍に登ったが、山頂は狭く、なかなか高度感があった。

大槍分岐から15分ほどでニセカウ手前の広いコルに到着。ここからハイ松に隠れた道をアンギラス(1830m)へ向かう。ハイ松帯は10mほどですぐ抜け出るが、そこから先は、笹の被つた急斜面の細い道を下り、やがて



広いコルに出る。正面に見えるアンギラスの岩峰が迫力をもって聳え立っている(写真②)。しかし、頂上まではしっかりとした道がついており、1箇所ロープの設置箇所はあるが、見た目ほど厳しくはない。頂上には小さな木製看板がハイマツの上に置かれていた。

アンギラスからの戻りは、ニセカウ手前コルまでの登り返しがきつかったが、コルからはなだらかな道を15分ほどでニセイカウシュッペ山の広い山頂に到着した。ここも木製看板が地面に置かれていた。先ほど登ってきたばかりのアンギラスと大槍が眼下にそびえ、遠くには表大雪の山々が展望できて、まさに絶景。裾野では木々が色づき始めていた。酒井さんとミアさんはすでに迂回路から下山をしていたので齊藤さんと2人で山頂写真を撮る。風が強く気温も下がっていたので、すぐに迂回路を下山する。大槍分岐からやや下った地点までたどり着くと、風も弱まってきて、ここで待機していた先行の2人と合流できた。

下山後は営業最終日の愛山渓俱楽部に寄り道して、源泉かけ流しの湯にしみじみと浸かった。

○参加者 L 佐藤精久、齊藤宣明、酒井史明
(会員外) ミア・ルイース・フーリー

東ヌプカウシヌプリ／三国山**10月12-13日【登山道】**

須田康仁

■東ヌプカウシヌプリ (1252m) 10月12日

週末の天気予報は良くなかったが、当日は朝から晴れ。十勝清水のインターを降りると、秋晴れの十勝の風景が広がっていた。登山口に近づくと、道路の両脇に車の大行列。この山はナキウサギ目当ての来訪者が多いようだ。

準備を済ませて入山。コース前半は以外と急斜面が続いたが、やがて緩やかになり、頂上に着く。それから先のナキウサギ・スポットへ急ぐ。カメラを構えた人々が10人くらい。我々も負けじとカメラを向ける。両側に2匹ずつ見ることができたが、1匹ごとに表情が異なり(写真③)、新しい発見があった。

さすがに10月、身体が冷えないうちに下山開始する。眼下に十勝平野、遠くに雄阿寒岳、雌阿寒岳を望む。この日は士幌のロッジに宿泊。

**■三国山 (1541m) 10月13日**

当初この日はウペペサンケ山の予定だったが、天気が午後までもたない予報なので、リーダーの機転で三国山に変更。登山口まで車で1時間程度。途中の三国峠には早朝から、紅葉狙いのカメラマンが多数見られた。

登山口には車はなく、我々だけのようだ。沢伝いに登っていく。足元には霜が降りていて、岩の上は滑る。やがて急登になり、稜線に出る。道は悪く、笹がかなり生い茂って足元が見えない。風も強くなるが、やがて、立派な石碑がある北海道大分水点に着く(写真④)。周囲の山々はガスがかかっているが、時折東大雪、表大雪の山々が見渡せる。そこから少しで三国山の頂上。寒さもあり、そそくさと下山開始。私の歩くスピードが遅く、皆様にはご迷惑をおかけしたが、ナキウサギに会うことができ、また大分水点に立つこともでき、充実した2日間だった。

○参加者 L 高尾美緒、今芳文、齊藤宣明、須田康仁
(会員外) 北原じゅん

中山小屋 - 庚申草山**10月18-19日【登山道】**

佐藤精久

中山小屋に泊まって庚申草山を目指す夏山納めに19名が参加。10月18日、黒川さんによる小屋での夕食メニューは、チキンステーキ、ポトフ、サラダ、じゃがいもバターと豪華版。そこに持ち込みの石窯で焼いたピザが加わる。

昨年結婚した小山内さん(旧姓中田さん)夫妻をお祝いして乾杯し、ケーキの替わりにピザに入刀するささやかなセレモニー。参加者の自己紹介の後は、齊藤さんのギター演奏(写真⑤)や、ストーブを囲んでの歌声などで、小屋の夜は更けていった。

翌19日の朝食メニューはパン、ベーコンエッグ、ポテサラ、カレースープと再び豪華版。小屋に残る黒川さん、荒田さん、橋本さん、小山内夫妻に食事の後始末をお



任せし、残りのメンバーは庚申草山(918m)へ。

林道に停めた車に乗り合わせて中山峠側へ向かい、すぐ右折して間もなく大きなカーブ地点が庚申草山登山口。もともと足元がぬかるみ、藪漕ぎも酷いところに、前日の雨がそれに輪をかけているので、全員長靴と雨具を着用する。

出発してすぐは、足元はぬかるんでいるものの、笹は刈られているので順調に前進できた。しかし、しばらく進むと笹がトンネル状となり、腰をかがめて進むようになり、やがて本格的な藪漕ぎになった。岩峰に近づくと、ますます藪が濃くなってきて、道を失いそうになるが、岩峰に向かう屈曲地点にピンクテープを見つけて、その上にはロープも設置されていたので、急斜面をよじ登る。岩峰に出ると眼下の紅葉が美しい。ここから北に向かって踏み跡を藪漕ぎして進むと、庚申草山山頂に到着する。木に頂上看板が設置されており、ここで集合写真を撮る(写真⑥)。無意根大橋を眼下に望み、札幌岳や狹薄山、定山渓天狗岳、鳥帽子岳、神威岳、百松沢山、そして手稻山などが展望できた。気がつくと空から白いものが降り始めていた。

○参加者 L 佐藤精久、荒田孝司、石手洗庸、小山内由美、京極紘一、黒川伸一、齊藤宣明、田中健、橋本一郎、長谷川恵美子、藤原千恵、三浦一恵、横山諒平、吉田郁子
(会友) 石丸なみ、藤原仁、益田敏彦
(会員外) 加藤雅也(11月入会)、小山内和哉

美瑛富士携帯トイレベース点検 & オプタテシケ山

藤木俊三

道内の山岳団体が管理連絡会を作り夏山シーズンに実施している美瑛富士避難小屋携帯トイレベースの点検パトロール、今年度は7月27日（日）が北海道支部の担当日でした。パトロールと清掃活動だけのために日帰りで小屋を往復する団体がほとんどですが、当支部ではほぼ毎回、1泊2日の日程でオプタテシケ山や美瑛富士の登山と組み合わせて実施しています。

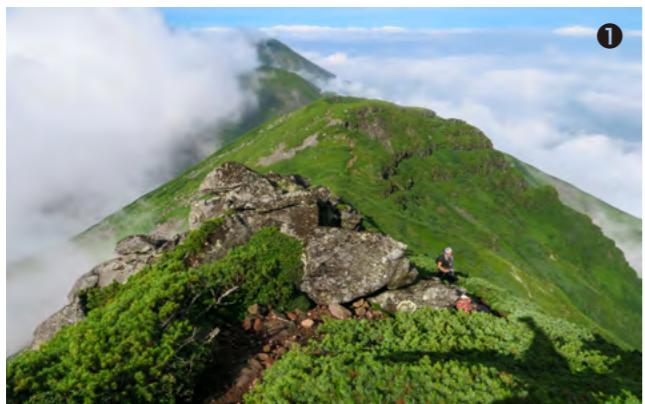
今回もオプタテシケ山登山を兼ねて行き、5人の参加者は南幌町の橋本一郎会員宅に集合。車1台に乗り合わせて、雨が降りしきる中、白金温泉奥の登山口に向かい、午前10時ごろ到着。週末は満車のことの多い駐車場も、悪天候のためか停まっていた車は2台だけでした。

雨は上がりましたが、下草や笹は濡れているため、雨具の下だけ履いて10時半に出発。ところどころぬかるみ、飛び出した笹が鬱陶しい登山道を2時間ほど歩くと薄日が差し、天候回復の兆しが見え始めます。午後1時、天然庭園でお昼を食べる頃には青空がのぞき、美瑛富士や麓も見えましたが、森林限界を超え、右手に現れるガレ場を過ぎる頃から再び雨が降り始めました。

美瑛富士避難小屋はこの時期から水場がなくなり、最も近い縦走路の美瑛富士の雪渓もすでに水は取れないという情報だったため、ガレ場の先の辛うじて水流のある小沢で調理用の水を1リットル汲みました。

このあたりから小屋にかけては一段と道が悪くなり、溝のようになった泥道に笹やハイマツ、灌木が覆いかぶさって非常に歩きにくく、特に悪天候の時は危険な悪路になります。トイレの問題もさることながら、こうした登山道のメンテナンスも何とかできないものかと思います。

ずぶ濡れ、泥だらけになりながらも午後4時過ぎに美瑛富士避難小屋に到着。雨も小やみになったので、まずは簡単に携帯トイレベースを点検、汚れや破損はないかを確認しました。野営場も特に問題はなさそうだったので小屋に入り、濡れた衣服を着替えてマットを敷き、各



②

自寝場所を確保して一息入れました。この日の先客は、小屋泊が男性2人、テント泊が男性1人だったので、小屋は広々と使うことができました。明るいうちに夕食を済ませ、早々にシュラフに入りました。夜中に外に出ると星空で、山のシルエットや街明かりも見え、翌日の好日に期待が膨らみます。

夜明け前に起きて、朝食は小屋では食べずに午前4時半過ぎに出発。下界は雲の下でしたが、山の上は朝日がさし青空も見える、まずまずの天気。留守番の橋本さん、北川さんを小屋に残し、藤木、峠原さん、山水さんの3人でオプタテシケ山に向かいました。

縦走路に出て高度を上げると、前方には端正な三角形のオプタテシケ山、振り返れば美瑛富士と美瑛岳が朝日を受けて緑色に輝く姿を見せてくれました。登山道脇には、盛りは過ぎたとは言え、イワギキョウ、イワブクロ、コマクサなどの高山植物が咲いていました。また、途中、旭岳まで見えるほど眺望がありましたが、登るにつれ十勝側の谷からガスが湧いてきて（写真①）周りが何も見えなくなることが何度かありました。それでも7時半過ぎに頂上に着いたときはガスが晴れて青空も見えましたが、残念ながらトムラウシ山は見えませんでした。記念写真を撮って下山を始めた途端、またまたガスが流れてきて、あまり眺望がない中を下りました。

2時間15分ほどで小屋に到着し、全員で再度トイレベースの点検とテントサイトのごみや汚物の確認（写真②）、そして小屋の清掃をして11時25分に下山を開始しました。このころからまた天気が悪くなり、雨具を着て、水滴をいっぱい含んだ笹やハイマツを分け、泥道で転倒しながらも、なんとか全員無事に午後4時に登山口の駐車場に下山。白金温泉でさっぱりしたあとは上富良野町の「第一食堂」で夕食を食べ、帰路に着きました。

○参加者 L 藤木俊三、北川麻利子、峠原直美、橋本一郎 〈会友〉 山水秀美

関西支部設立90周年記念式典・第38回全国支部懇談会に参加

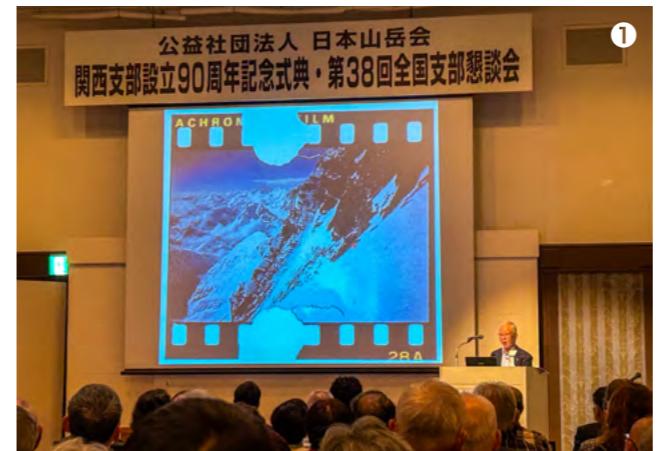
田中健

関西支部設立90周年記念式典も兼ね、同支部の主催で大阪にて開催された日本山岳会の第38回全国支部懇談会に、北海道支部から4名が参加しました。

10月26日午後、式典会場の新大阪・大阪ガーデンパレスに関西支部も含め全国の支部や本部から約150名が集まり、参加者には、関西支部設立90周年記念誌の『関西山岳史』と『関西支部県境縦走 踏査報告書』が手渡されました。いずれも、関西支部がこの式典に合わせて制作した大部の労作です。

14時30分、小黒節郎関西支部事務局長の司会進行で記念式典が開幕。水谷透関西支部長に続いて、橋本しり日本山岳会会长が挨拶。そして、来賓の小畠和人大阪府山岳連盟会長からの祝辞がありました。

記念講演は重廣恒夫元関西支部長・日本山岳会副会長による「ヒマラヤ今昔」（写真①）。隊員、登攀隊長、隊長として多くの登山隊を成功に導き、長らくヒマラヤ登山の第一人者として知られた重廣さんが、1973年エベレスト南西壁を皮切りに、1977年K2、1980年チヨモランマ北壁、1984年カンченジュンガ縦走、1995年マカルー東稜など8000m峰の大登山隊から、関西支部の2016年ナンガマリII峰、そして日本山岳会120周年記念事業の「グレート・ヒマラヤ・トラバース」まで、半世紀以上の自らの記録・体験とともにヒマラヤの風土と人の変遷をたどる講演は、興味深いものでした。



18時30分からは懇親会。水谷支部長の挨拶に続き、柏澄子日本山岳会副会長の発声による乾杯（写真②）で開宴し、全国の会員が懇親を深める場となりました。各支部の紹介などのほか、来年の全国支部懇談会を開催する富山支部の河合義則事務局長のあいさつで、20時30分過ぎに懇親会は閉会。その後、近くの居酒屋で二次会が開かれ、さらに親睦が深められました。

27日は8時30分にバスでホテルを出発して明治の森箕面国定公園へ。箕面大滝（写真③）の前に全員が集合して記念撮影。「日本の滝百選」にも選ばれている落差33mの名瀑です。そこから、記念観光のグループ約15名は滝道を下って瀧安寺へ。一方、記念山行のグループ約70名は7班に分かれ、東海自然歩道起点へ。

東海自然歩道はここから東京・明治の森高尾国定公園まで、11都府県にまたがる総延長1700km超のロングトレイル。その最初の部分を歩いて勝尾寺を目指します。箕面名物のもみじの紅葉にはまだ早い時期でしたが、急登もある細い尾根道は、杉や檜の木立に囲まれ（写真④）、北海道にはない植物も見られ、変化に富んでいます。展望が開けると大阪の都心・高層ビル群が一望のもと。高さ300mの「あべのハルカス」も同定できました。

今日の最高点・最勝ヶ峰（540m）に着くとすぐに、開成皇子の墓。山の中に皇族の墓があるなど、北海道では考えられません。かつては皇室財産の御料林だったため、これまで歩道の両側にあった「大阪府」の境界標が、御料林の境界を示す「宮標石」に変わります。

急斜面を降ると勝尾寺の境内。西国三十三所の二十三番札所で、「勝ち運の寺」として知られる勝尾寺は、平日にもかかわらず大賑わいで、その9割以上が外国人。至る所に「ダルマみくじ」が置かれ、奉納された「勝ちダルマ」が並ぶ境内を散策後、14時に全員集合してバスで新大阪駅へ。15時前にそこで解散となりました。

○北海道支部参加者 清水義浩、田中健、藤木俊三、和田マサコ

日本山岳会北海道支部 2025年度 忘年会

【日時】12月14日(日) 16:00 - 18:00

【場所】札幌エクセルホテル東急 2階宴会場「豊平」
札幌市中央区南8条西5丁目 地下鉄「中島公園駅」徒歩3分

【会費】6,000円 【申込締切】12月12日(金)

【申込先】井田雅之
清水義浩

日本山岳会 120周年記念式典・令和7年度 年次晩餐会

【日 時】12月6日(土)

【講演会】

展示会●12:00 - 講演会●13:00 -
式 典●16:30 - 晩餐会●18:00 -

■エベレスト最大の謎
マロリーとアービン 捜索40年
ヨッヘン・ヘムレブ

【場 所】京王プラザホテル(東京・新宿)

■日本山岳会ヒマラヤ登山の歴史 重廣恒夫

*支部単位での申込み、振り込みなので、参加希望者は11月17日(月)までに下記あてご連絡ください。
【申込先】清水義浩

*12月6日(1泊)の宿泊について それぞれの申込先へ11月29日18時までにお申し込みください。
●池袋ロイヤルホテル 素泊まりシングル12,500円(税・サービス料込)
宿泊希望者は、日本山岳会事務局へ
●会場の京王プラザホテルも宿泊可能。朝食付きでシングル、ツイン、トリプルと各種あり
宿泊希望者は宿泊予約専用電話へ「日本山岳会」と言ってお申し込みください。

*12月7日の創立120周年記念交流登山@高尾山については、各自で申し込みをお願いします。

支部会員が制作に関わったカレンダー「秀峰群 日高山脈」が完成

日本山岳会北海道支部の会員3人と団体会員である北大山の会の会員4人が編集委員として刊行した書籍「北海道の脊梁 日高山脈」(2025年5月、共同文化社刊)に関連して、編集委員の植田拓史会員が代表を務めるりんゆう観光が、この本の掲載写真を生かして、2026年カレンダー「秀峰群 日高山脈」を制作した。

カレンダー編集は北海道支部有志が手がけ、支部会員や北大山の会会員らの撮影による、四季を通した20枚の写真と地図で12カ月を構成し、あとがきで、この山脈に紡がれた「山と人」をめぐる物語、書籍、カレンダーの編集意図を伝えている。

りんゆう観光から支部に50部が寄贈され、支部の行事や忘年会に参加した会員・会友に配布される。りんゆう観光本社や出先の大雪山層雲峠・黒岳ロープウェイ駅舎、登山用品店「秀岳荘」などで販売。(黒川伸一)



1部 1,500円(税込・送料別)
【問い合わせ・購入申し込み】
りんゆう観光

2025-26 積雪期の主な山行予定

- | | |
|-----------------------|---|
| 12月6日(土)
～7日(日) | ●上ホロカメットク山域での氷雪訓練 [アイゼン・ピッケル] L: 齋藤幸市、後藤幸治
白銀荘泊 ※申し込みは黒川伸一まで |
| 12月20日(土)
～21日(日) | ●三段山、前十勝、上富良野岳、富良野岳 新雪山行/雪崩対策訓練 L: 黒川伸一
[スキー/スノーボード/スノーシュー] 白銀荘泊 |
| 12月25日(木) | ●砥石山 [スノーシュー] L: 藤木俊三 日帰り |
| 12月27日(土) | ●迷沢山 上平沢林道ルート [スキー] L: 山内忠 日帰り |
| 1月2日(金・祝) | ●キロロ・イレブンセブン峰周辺 [スキー] L: 黒川伸一 日帰り |
| 1月4日(日) | ●羊蹄山・マッキモルート [スキー] L: 黒川伸一 日帰り |
| 1月12日(月) | ●つげ山 [スノーシュー] L: 藤木俊三 日帰り |
| 2月1日(日)or8日(日) | ●恵庭渓谷 モイチャン滝 [アイスクライミング] L: 齋藤幸市 日帰り |
| 2月7日(土) | ●白井岳 朝里岳ルート [スキー] L: 山内忠 日帰り |
| 2月11日(水・祝) | ●奥沢水源地 - 於古発山 - 遠藤山 [スキー] L: 黒川伸一 日帰り |
| 2月14日(土)or15日(日) | ●オコタンペ湖 - フレ岳 - フレ沼 [スキー] L: 佐藤精久 日帰り |
| 2月14日(土)or15日(日) | ●飛散岳・北飛散岳 [スキー/スノーシュー] L: 黒川伸一 日帰り |
| 3月1日(日) | ●劔山熊見山「奥の院」 [スキー] L: 黒川伸一 日高町民泊施設前泊 |
| 3月7日(土)
～8日(日) | ●幌内山 (賀茂川 or 新幹線トンネル口から) / 寿都天狗山 or 観音山 [スキー]
L: 黒川伸一 黒松内ぶなの森自然学校泊 |
| 3月14日(土)
～15日(日) | ●増毛山地の山 (知来岳、増毛天狗岳、雄冬山など) [スキー] L: 佐藤精久
増毛町・はまなす会館泊 |
| 3月20日(金・祝) | ●恵庭岳 北東尾根ルート [スノーシュー] L: 藤木俊三 日帰り |
| 3月20日(金・祝)
～22日(日) | ●道東の山 (斜里岳 + 雄阿寒岳、藻琴山など) [スキー + アイゼン] L: 田中健
斜里温泉泊予定 ※定員6人程度 |
| 3月28日(土)
～29日(日) | ●徳舜瞥山 北西尾根/オロフレ山 北西面/来馬岳-バケモノ山 [スキー] L: 黒川伸一
現地ロッジ泊 ※定員6人 |
| 4月5日(日) | ●本俱登山 [スキー/スノーシュー] L: 黒川伸一 日帰り |
| 4月25日(土)
～26日(日) | ●中山峠-境峠-風来山-ポン山-庚申草山-東中山-定山渓トンネル [スキー/スノーシュー]
L: 佐藤精久 中山小屋泊 |
| 4月29日(水・祝) | ●余市岳 キロロスキー場から [スキー] L: 黒川伸一 日帰り |

*天候や諸事情で中止や延期になる場合があります。定員もあるので、詳細は各リーダーまで

12月13日にスキー練習実施予定

冬本番を迎え、スキー(滑降)練習を、右記の日程・場所で実施予定です。参加者数に応じて、指導役の方に打診するので、参加希望者は11月中旬に黒川までご連絡ください。

会員・会友の動向

■新入会員	いしてあらい 石手洗 庸	17553	■物故会員	長谷川雄助	6103
	加藤 雅也	17591			

長谷川雄助さんを悼む

滝本幸夫

長谷川雄助会員が9月末、亡くなった。すい臓がんを患つて約3年間、生を全うされた。

帯広に勤務していた昭和35年（1960年）10月に帯広エーデルワイス山岳会を立ち上げて1年半後、長谷川さんが友人を誘つて2人で入会してくれ、それ以来の付き合いとなる。お互ひ20代だったころであり、かれこれ60余年になる。

函館出身の長谷川さんは函館中部高校を卒業後、北海道警察の警察官となり、エーデルワイス山岳会に入会された当時は帯広警察署勤務で、多忙にもかかわらず会山行がずいぶんと増え、山岳会は一段とレベルが上がった。長谷川さんは、この山岳会で現夫人と知り合って家庭を築かれ、私は夫妻ともども、帯広以来の吉い山仲間ということになる。

お互ひ転勤族のため、その後帯広を離れてしまい、会う機会も減ってしまったのだが、真に友情を深めることになったのは、札幌に転勤後の日本山岳会北海道支部での活動だった。再会した当時、長谷川さんは支部の事務局長として支部運営を担つておられ、支部の基盤固めで能力を発揮されていた。

そして第10代支部長となられたのだが、分水嶺踏査の訓練として2007年11月に実施した上ホロカメットク山の氷雪山行で雪崩事故（4人死亡）が発生し、その責任を取る形で退任され、私が第11代支部長として後を引き継ぐことになった。

その後も「北海道支部50年のあゆみ」の編集など支



「三越会」で京極紘一さん、滝本幸夫さん、西山泰正さん（右から）と歓談する長谷川雄助さん（左端）

= 2025年6月25日、三越札幌店「ランドマーク」

部50周年記念事業をはじめ、支部の様々な活動に関わられ、その功績はたいへん大きなものがある。この当時以来、私と長谷川さん、京極紘一さん、西山泰正さんらで不定期に三越札幌店のレストランに集まって、通称「三越会」なる集まりを持って雑談するようになり、この集まりは約10年続いてきた。今年6月の集まりでは、長谷川さんは抗がん剤治療のさなかだったと思うが、非常に元気で、いつものように元気そうに話をされていた。あれから3か月後の急逝に、ただただ驚くばかりである。

長谷川さんは、枝幸署長などを務めて退職した後も、山岳会の付き合いのみならず、晩年は町内会活動でも長く活躍され、多忙な日々を過ごされた。葬儀は家族だけで行われ、お骨は郷里・函館の墓に入ると聞いている。

ご冥福を祈りたい。

ホームページ開設に向けて

黒川伸一

北海道支部のホームページは数年前から閉鎖されたままで、2011年から契約しているレンタルサーバーを使って現在、新たなホームページづくりを進めています。何とか11月中に稼働させるべく、ホームページ運営で効果を上げている他支部や山岳会にも助言をもらい、構成内容を精査しています。

道外支部の半数以上がホームページを持つ中、北海道支部の会員、会友にとっての連絡ツールとして、また外部に向けての広報ツールとして、2019年に支部として開設したフェイスブックと連携させながらの運営を目指しています。

支部役員と会員・会友の連絡手段としては、年4回発行の支部通信とメーリングリスト（双方向のメーリングリストは2019年に稼働開始）がありますが、これだけでは、連絡や情報提供に時間がかかったり、メール文章を読む面倒さがあったり、スマホで分かりやすく情報を得にくかったり、などの点で利便性改善の余地があり、ホームページに会員だけで

やり取りができる「会員サイト」を設けるなど付加機能を付けることで、一定の効果があると考えています。

ホームページ開設の主な理由は以下の4点です。

- ・支部として契約して長年持っているレンタルサーバーを有効に活用したい
- ・会員・会友に支部行事等に関して随時の案内とやり取りをビジュアルにできる
- ・支部の活動内容を内外に分かりやすく素早く伝えることができる
- ・利用する側が面倒な設定がなく、パソコンでもスマホでも気軽に閲覧できる

ホームページは、支部の沿革や概要を伝える「固定ページ」と、随時更新していく「投稿ページ」で構成され、「投稿ページ」には支部としてのお知らせや山関連のニュース、山行報告などを会員に随時投稿してもらえるようにする予定です。